大野城市歴史資料展示室　解説シート　考古 No.49

新羅土器

大野城市教育委員会

写真１　唐山遺跡出土の新羅土器

新羅土器とは？　４世紀から７世紀前半の朝鮮半島では、高句麗・百済・新羅の三国が抗争する動乱の時代でした。このような政治情勢の中で、日本には朝鮮半島の国々から様々な新しい文物が伝えられました。これらの日本に持ち込まれたモノの中で、新羅で作られた土器と特徴が一致するものを日本では、「新羅土器」と呼んでいます。**写真１**は、大野城市乙金東３丁目にあった唐山遺跡の古墳から出土した新羅土器の壺です。新羅土器の最大の特徴は頸から胴にかけて付けられた文様です。**写真２**は、文様のアップです。二重円と点の文様が入ったスタンプを押したもの（円弧文）と櫛状の工具を縦に押したもの（縦長列点文）からなり、まるでのれんを垂らしたような感じに見えます。この土器は文様などから７世紀後半のものと分かります。

写真２　新羅土器の文様

大野城市内出土の新羅土器　大野城市では、唐山遺跡以外に、王城山古墳群Ｃ支群からまとまって新羅土器が出土しています。

写真3 手前が蓋、奥が壺です。壺は新羅土器に特有の扁平な形で、円形のスタンプ文と山形文が付けられています。文様の特徴などから7世紀前半のものと分かります。

写真3　王城山古墳群出土の新羅土器

唐山遺跡と新羅土器　唐山遺跡では、ゆるやかな丘陵上に6世紀後半から7世紀後半にかけて営まれた5基の古墳が見つかっています。1・2号墳では、7世紀後半に墓に関わる祭祀が行われており、その際に使われた土器の中に新羅土器がありました。朝鮮半島で作られてから間もなく、日本に持ち込まれて祭祀に使われたと考えられます。

写真4　唐山遺跡の全景

新羅土器出土の意義　新羅土器の出土は、大野城市内の唐山遺跡・王城山古墳群C支群の集団が朝鮮半島と大和政権（日本）との交流に関わりが深い集団であり、この古墳の広がる大野城市乙金地区周辺は、7世紀を通じて朝鮮半島との交流に関わりが深い地域であったことが分かります。また、このころの大陸との情勢を見ますと、西暦663年に大和政権は唐・新羅連合軍に白村江で惨敗し、敗戦の翌年に水城を、翌年には大野城を築いて、大宰府の防衛網を整えて国家を挙げて唐・新羅に対する防衛体制が整えられる緊張関係の中にあったと考えられています。しかし、しばらくすると対外交流の窓口として「筑紫館」が博多湾岸に築かれ、文献に新羅・唐との往来の記述が見られるようになります。新羅土器は、7世紀代の東アジア情勢やその最前線である当時の博多湾沿岸の様子を示す資料として重要なものといえるでしょう。

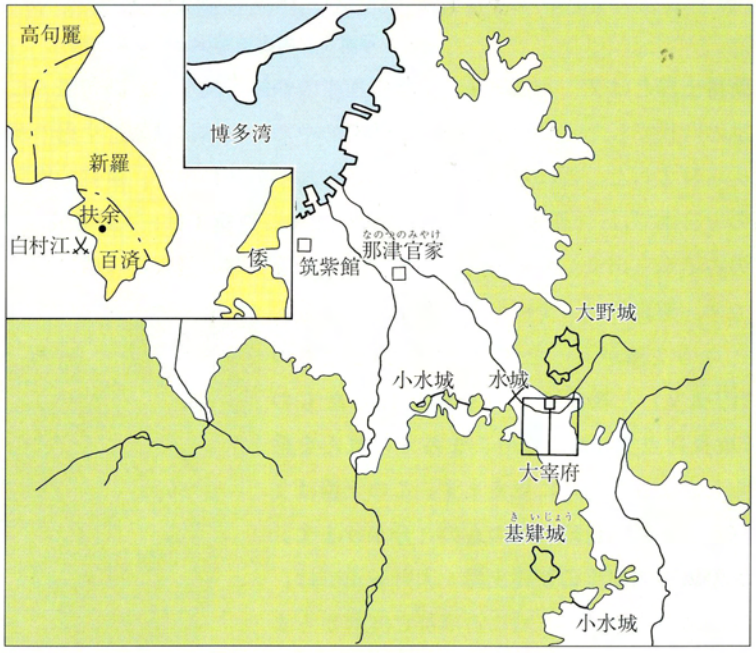

図1　7世紀代の大陸と日本の情勢